



第124号  
 発行所 上高井教育会  
 発行人 上高井教育会長 小林義雄  
 編集人 小林義雄 委員 長 幸 社  
 印刷所 須坂新聞社

# 本年度の教育会の活動を顧みて!!

米川 昭司

私ども上高井教育会も四月当初に小林義雄先生を新会長に選出してより幾多の行事や活動を展開し、この二月下旬の代議員会を最後に一切の活動を終了します。

●本会は会員相互に関連を保ち、その職能の向上をはかり教育発展に貢献する……と云う目的を見事に達成して今ここに、その活動の一切を閉じようとしております。今この終了の機会に静かに実践してきた諸活動を顧みると、○あの中教審が今後の教育の重要視点の一つとして取り上げた「自己教育力の育成」具体的には「ねばり強く自己形成をして行くための指導のあり方」を中心テーマに三枝先生のご指導を受けて二年目、企画委員会は常に前向きな姿勢で機会あるごとに資料を提示し、各委員会の活動を援助してきている研究委員会の活動は、先ず授業の姿で実践的なテーマに迫る研究として高く評価されると思えます。昨年一年目はまだ「自己教育力」そのもの、論

理的な意義づけやその理解が先行するきらいが多く、本年になってようやく各委員会の研究方向も位置づき、より深まった実践研究へと進められたように感じます。この研究委員会の運営(活動)は、長年に渡る歴史的な伝統のある本郡独自の研究活動であって、毎年、前年度の実践と反省を生かし継続して積みかさねられていくもので、より深まりを期待したいと思えます。○もう一つの教育会の重要な事業(活動)に同好会があります。これも同好の士が自主的に集まり相互に資質の向上を願ひ、特に哲学を始め、歴史的に長い伝統を受け継ぐ文学、美術など十三の各同好会が、本年も会員の自発的に継続的な活動を通じて、より意欲的に研修を深め立派な成果をあげて呉れました。や、会員が老年化し固定化し若い先生がたの参加の少ないのが心配になりますが、より多くの参加を期待します。○その他 主な活動のみ上げてみますと

●四月下旬の新任者歓迎会  
 これは今年度本郡に新任した若い先生方二十一名が参加し先輩と席を同じく懇親をする機会です、昨年先輩、加藤(常中)関(日野小)両先生の経験聞き、一人一人自分の新任の感想と希望を含め自己紹介をして懇親するもので、新会員にとって感動的であり感激の機会であったと思えます。●春の定期総会と秋の講演会  
 総会では前半が会員の意見発表で、堀込明紀(墨中)牧美雪(栗が丘小)両先生、後半は「世界に於ける東洋の現代的意義」と題する筑波大の高橋進先生の講演を聞き、秋には「二十一世紀を展望して日本人の生き方」大阪大の山崎正和先生の話の聞きました。時には日頃の現場を忘れ、広い世界より自己を見なおす機会として有意義なひとときであったと思えます。●六月下旬の教育懇談会  
 各校よりの代表者(年齢、性別に選出)を二十名ずつ三つの分散会に分かれ、常任委の山崎(墨中)市川(小布施中)

小林(栗が丘小)の各先生を助言者とし、日頃の教育現場の問題や悩みを出し合い実践と研修のあり方を求め合うよい機会でした。●十一月の女教師大会と研究発表会  
 いずれも会員の研究実践の発表の機会ですが、研究所で学んだこと「市川和恵(仁礼小)」「子どもと共に」西沢松美(清野小教頭)。「読書指導」田中尚子(旭ヶ丘小)「書写指導」塩原義郎(仁礼小)「ポリフォニーと音楽」内山満(高山中)「良寛と童心」山崎昌(墨中)の各先生方。それ、長年に渡る尊い研修実践を踏まえ、日頃の生活に生きて働く深まりを感じました。●その他、子ども達の健全育成の会「教育研究会」：「のよう」に他団体と共催の事業もそれなりに目的を立派に達成し高く評価したいと思えます。以上、代表的な活動を顧みましたが、いづれも初期の目的を果たし十二分な成果を上げることが出来たものと思えます。最後に再び「教育は人である」教師その人の限りない精進こそ教育の源泉である。教育は教師の全人格と子ども

須坂市上八町にある霧原大元神社の春祭り(四月二十二日)秋祭り(十月十日前後)一対掲揚される幟である。西郷隆盛の弟従道の子息西郷従徳により、大正九年に、この種の幟としては珍しく篆書で書かれた。現在の幟は昭和六十一年に複製されたものである。

拝殿の中にも従徳によって書かれた「霧原大元神社」という文字が額に入れ掲げられている。

幟の詠み方は、皇威洽六合(皇威六合に洽)明徳伴大易(明徳は大易に伴)天皇の威徳が四方に及んで、明徳は太陽に等しい、の意である。(望月)



## 上高井教育会だより

- 1・9 臨時常任委員会
- 12 研究委員会世話係委員長会(3)
- 16 第40回県女教師研究大会
- 18 会場 信濃教育会館
- 26 同好会世話係会長会(3)
- 2 第8回常任委員会
- 6 第9回代議員会
- 9 上高井教育会報第124号発刊
- 18 第9回常任委員会
- 20 第10回代議員会
- 3・1 上高井教育会誌「上高井教育」第44号発刊
- 7

## 郷土の文化財 ⑧

### 霧原大元神社の幟

# 本年度の実践をふりかえって

…… 本年度もあとわずかで終わろうとしています。各校では、一年間の教育  
 …… 実践をふりかえり、反省、まとめの時期をむかえておられることでしょ  
 …… う。ここに4名の先生方に貴重な教育研究をお寄せいただきました。  
 …… とともに味わいながらこの一年間を省みたいものです。

## 古典と地域教材

平野 誠

本郡へ今年度から赴任し事情がわからない私にとって、何よりもありがたかったのは多くの先生方からのアドバイスだった。古典を身近で親しみのあるものにするために、地域の教材をとりいれようという発想で始まった研究だったが、上高井にどんな素材があるのか私は全く知らなかった。

困ったところ、先輩の先生が、学校の図書館の片隅にあった「三峯紀聞」を見つけてくださった。三峯紀聞は須坂藩家老丸山辰政翁が江戸時代末にまとめた書で、人物伝、故実、地名考、奇事異聞等がおさめられている。「龍燈え事」「鼻取太子え話」「大蛇を食し話」「奇石」「天狗小屋を揺る」「黒門の怪」「野狐塞路話」など興味をもちそうな話があったものの、古文で書かれていたため中学生には難しい。何とか古文のまま読ませたいと思い、易しい話を見つけると今度は内容的に深まりがない。ここでも郷土史に詳しい方の助言をて、三峯紀聞の中から「相森え故事」を教材として扱うことができた。

さらに教材化はできなかつたものの、十返舎一九が何度

か長野県を訪れ、その書の中で上高井についても述べた部分があることを教えていただいた。また、ある先生からは以前に研究された一九についての資料もいただき、非常にありがたかった。そして今さらながら自分の知らないことの多さに驚いた。実践では石

## 地域素材の教材化の試み

常長 虎 徹

碑や絵巻、一茶の俳句を使つた話をお聞きし、てまはかかったが古典も工夫しだいで大きく変わると感じた。三峯紀聞は広く知られており、扱った方も多いようだ。「高井の民話」に三峯紀聞を元にした話ののっているし、須坂新聞に口語訳と解説を連載された先生もおられる。国語教室の中での実践もいくつかあるにちがいない。どんな話をどんなふう教材化したか、ぜひお聞きしたいものだと思つている。

(舞台は井上村)

語り、明治七年、井上村のある日の出来事です。夜、井上村郵便局のあたりから火事がおこりました。火は被差別部落のN地区の方へも燃え広がってきました。(声だけで火事の様子をもち上げていく)

カンカンカン(半鐘の音)  
 村人一、二、火事だー  
 三、四 大変だー  
 五、火がくるぞー  
 六、火を消せ、水だ、  
 七、火事だ………

語り、半鐘を聞いて近くの幸高、中島福島などいろいろな村から、消防ポンプが応援に急いでかけつけてきました。

だろうか。臥竜山興国寺にもいくつか伝説が残っているが文書としては残っていないので、他もさがしてみたら物語のようなものは見つからなかった。教科書教材の「竹取物語」に結びつけようという意図があったので範囲がせばまってしまったが、物語以外の分野なら文語の形で残っているにちがいない。短歌・俳句などに詳しい方もおられると聞く。これを機会に、私自身古典教材との出会いを新鮮なものとし、その魅力をもっともたちに伝えていきたいものである。(墨坂中)

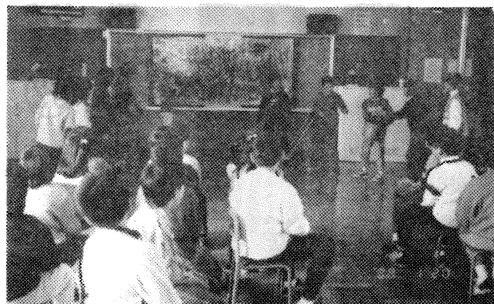
N地区にも火がどんどん燃えひろがってきました。

(ここで幕があく。火の絵) 村人一、(左手から出て)早く。消防ポンプ、こっちへ来てくださーい。

消防団、ワッショイ、ワッ(右からかけ足で進んでくるが、途中で突然パタリ止まる。あと消防団は 動作だけで声は出さない) 村人二、大変だー、もう焼けてるんだぞー!

村人三、はやく私たちN地区も消してください。(消防団は消そうとする人もいるが、ほとんど帰ろうとする……)

「人ごと」になりがちである。部落差別をはじめあらゆる人権問題が、自分と関係がうすいと受けとられるとき、その指導(学習)に多くを望むことはできない。この問題を自分のものと正しく認識するために、本校では解放子ども会——その解放学習の内容をも含めて——の教材化に取り組んでいる。



これは、N地区の方からの聞きとりをもとに、四年生の学習の中で構成し子どもたちが発表した劇の一部である。子ども達はこの劇を演じたり見ることによって、当井上にあった部落差別の過酷さを心で受けとめ、不当さに激しい怒りを持つことができたように思われた。

厳しい競争社会の中で、部落差別をはじめもろもろの差別が見えにくくなっている現在、子どもにとっても私たち教師にとっても、部落差別が

この問題を自分のものにするだけでなく、自分の生き方を求める上でも自分の真正面に訴えるために、ひきこまれる体験、を学習の中に組みこむことが必要であると考え、ひきこまれる体験として、差別と闘ってこられた地区の方との出会い、足を使っての調べ活動、全体を動かしての発表活動などがあげられる。このことによって、わかる同和から感じる同和教育へと脱皮できるのではないか。

(井上小)



# 「二つの涙」

木下久資

今年度は、お陰様で、長野県の男子チームとしては初の北信越大会優勝という好成績を修めることが出来ました。

しかし、私が顧問になった頃の相森のバレーは、こんな栄光には全く縁遠い存在でした。郡大会でも、一勝すればいい方。負けると、一応悔しいとは言うものの、その感情の籠らない言葉に、寧ろこちらが悔しさを覚えたものでした。勝っても負けても、とにかく泣けるチームを作ろう。

これが私の最初の決心でした。三年目の昭和五十九年度、前年の新人戦は三位。やはり練習試合をやってもなめられてばかり。ただそれが悔しくて、当時優勝候補と評判の高かったそのチームだけに勝とう、と誓い合ったものでした。郡大会、いよいよ目指す相手との対戦。子供達は燃えに燃えました。そして、アツという間に撃破した瞬間、子供達の目は皆涙で濡れていました。更衣室に戻っても、まだオイオイ泣いている者もいました。それは、一つの事を一心に思い詰めて、努力した者のみが流せる尊い涙であつたと、今でも信じています。

か一勝をと頑張ってくれていた子供達の気持ちは、裏腹に、全国という大舞台は、一旦乱れ出したチームには非情です。四点と十一點。実にあっけない勝負でした。崩れた時に立て直す術を知らない監督。タイムを取るタイミングの悪さ。

一昨年、苦い経験をした苦なのに、無策のままの同じ試合展開。陽の入らないガラーンとした一室での試合直後のミーティングは、正にそのままでの雰囲気でした。長い重苦しい沈黙。どこかで嗚咽が漏れました。一人、又一人とそれは広がり、涙の渦の中に私は茫然と立ち尽くしてしまいました。こんな筈じゃ……。試合に負けたことよりも、泣かれた方が応えました。外へ出ることを促しても、誰一人立ちません。コンクリートの床を濡らす幾多の涙に、私は自分の無能さを詫言いました。

部活動であるからには、私は常に勝つことを目標にしています。しかし、それは目的ではありません。所詮勝敗は二の次。ただ、勝つことを目標にどれだけ真剣に頑張れたか、それが問題だと思っております。真剣にやった結果としての涙に、私は、共に喜びを感じ、反省させられ、或いは励まされ、そして、言いようのない使命感に再び我が身を委ねていくのです。(相森中)

小山小学校に赴任して早一年が過ぎようとしています。音楽の学習を通して、心を開いて音楽し、努力を惜しまず頑張る子をモットーに、と取り組んできました。拙い実践の一端を紹介させていただきま

歌唱表現において、心を開かず、歌う意欲のみられない子が大半をしめているクラスがありました。さまざまなかんじの中で、心が重く立往生していたとき、本校の小林校長先生がこんなことを話されたのです。「子どもが受け入れない気持ちをもっている時、その子どもが何に関心をもっているのか、それを見つけて子どもに迫っていくことも必要だ。」と。少々あせりの気持ちを抱きながら、しばらく歌唱をさせてみました。二学期中頃から合奏することに自

信がついたのか、顔も和らぎ、ささやかな歌声がきかれるようになってきました。また、最近のことですが、「息子が大太鼓ができなくて先生におこられるから、学校に行くのがいやだ」と言っていて困らせている。」と、ある母親から電話がありました。弱音を

## 音楽指導の

### 実践から

堀田 美恵子

をはずかに精一杯努力し、つまづきを克服していくH君になるよう、きつきたしなめました。しかし、H君が自信をもって、その曲にかかわれるまで見守っていたらどうか、その子がかもっている音楽する喜びや楽しさを摘みとっていな

最後に、合唱団の活動について紹介させていただきます。団員はやる気に漲り、より美しい歌声作りや、豊かな表現にと、前向きにとりくんできました。毎日の練習時間は朝二十分、放課後三十分程度(冬)ですが、継続は力なりをモットーに集中して歌える

ようになつてきました。声作りや曲作りでは、できるだけ具体的なことはをみつめて指導するように心がけています。また、曲の最初のフレーズに心をどううちこむか、そのフレーズの輝きがみられるまで歌いこむようにしています。階名唱は、早く正しい音程につながるので大事にしていきたいと思つています。今では団員一人ひとりが、歌い手であり指導者であるという心構えで、私が出られないときなど、団員が協力しあつて、自主的に活動できるようになつてきました。音はその都度きえていきますが、瞬間の感動を求めて、平素の指導のまずさをいつもふりかえりながら子どもたちの素直な気持ちを大切に、これからも指導にあつていきたいと思つています。(小山小)

## 学校づくり

### 花咲きかおれ

旭小

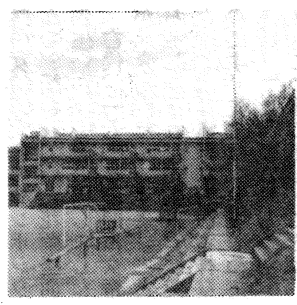
校歌の一節に、石をほり草木を植えて新しい基築いた大きな願いとこしえに花さきかおれと、創設当時の、学校・PTA・地域の人々の願いがうたわれています。

昭和三十四年から、果樹園の中に住宅団地、工場団地として計画的に造成されてきた歴史の浅い町に住む、地域住民は融和と連帯を求めて、

数々の町づくり運動を進めてきました。さらに、新しい町に光を求め、西に北信五岳、東に峰の原高原を眺望できる地に、昭和四十六年、明るく近代的な校舎、広々としたグラウンドを持つ新しい小学校が建設され新しい学校像を求め、その基を築いてきました。また、思いやりのある、たくましい行動力のある子どもを育成を願つて、地域の未来を担う児

童の教育に努めてきました。この願いの実現により豊かな人間性の育成をめざして、昭和五十六年より、青少年赤十字に全児童が加盟し、昭和六十年より、研究推進校の指定を受け、たゆまぬ研究と実践の成果を、全国各地から

今までの研究の成果を基に本校教育目標「せいせいっばい自分の花を咲かせよう」の具現化をめざし、本年も青少年赤十字活動を学級づくりの基底とし、よいこといっぱいの木、思いやりの木、V・Sタイム、ゴミゼロの日、年賀状の交換、各種募金、使用済み切手集め等々の活動を通して学級はもとより、学年・学校での所属感、連帯感を高め、人のためにつくすことの尊さを感得させようとしています。(山田 一仁)



# 火鉢



## 非まじめで

### ありたいのだけれど...

村山 幸子

今年の正月、お年玉でパソコンを買った。数年前の機種で性能は今のものより劣るが初心者である私には十分である。なぜ買ったのかというと何ができるかわからないけれどおもしろそうだったからだ。

# パソコン雑感

小平知行

しかし、いざやってみるとなかなか難しい。例えば解説用語がどんどん出てくる。解説も簡単で「一をきいて十を知れ」とも言っているかのようにある。また、たくさん本を買って、端からプログラムを打ち込むのであるが最初はやさしいのに指数関数的に難しくなる。もっと例題を取り入れ、段階的に進んで欲しい。更に困ることは動かないプログラムも出てくる。BASICという言語が微妙に違うらしい。パソコンにも方言があるのだ。



(高山中)

標準語で書いて欲しい。不満ばかり言ってしまったがわけがわからなくても実際にプログラムを動かしてみるとおもしろい。一万までの和を求めるとやるとたちまち計算してしまふ。円や三角形がどんどん描かれたり動いていたりすると、退屈な入力作業も忘れる程うれしい。(これが成就感だ！)

まだ始めたばかりでプログラムの内容もおもしろくない。早くグラフィックのような高度なところが遅々として進まない。苦労せず、できるような方法はないものだろうか。(まるで生徒と同じだ。)

とにかく始めたからにはある程度わかるまで続けたい。パソコンが部屋の片隅でほこりだらけにならないようにしたいものだ。

この半年以上、忙しさにまけてゆっくり読書をするなどなかったのですが、最近になって急に本を読み始めました。きっかけは、冬休みに立ち寄った本屋で見つけた「田辺聖子の小倉百人一首」です。色鮮やかな挿絵と「むかし、あけぼの」で好感をもった田辺聖子さんの著書であるということとで即座に買ってみました。二巻あったのですが、読み終えるのにその時間が、読み終えませんでした。和歌の解釈と共にそれぞれの作者の生きた方について述べてあるその内容について引き込まれてしまった私は、すぐに影響されやすい性質なので、平安時代の有名な作品「源氏物語」をじっくり読んでみたいという欲望にかられ、図書館へ行きました。ちょうど一冊目を読み終えた頃、あるテレビ番組で作曲家のS氏がマラーについて話しているのを聞きました。私の悪い癖が表れ、源氏物語が途中であるにもかかわらず、今度はマラーについて書かれた本を読みたくなり本屋に行きました。

てしまいました。まったく、私は典型的な日本人です。(熱しやすく冷めやすい)でも、せっかく本屋に来たのだからと、本を見て回り、永井路子さんの「歴史をさわがせた女たち」や田中澄江さんの「歴史のなかの愛」など数冊買って帰りました。今、時間ができこれらの本を読んでいるうちに、ふと先日参加しました

## 魚との対話

我と

私は、つりが大好きである。釣りははじめて、かれこれ、四十年近くになるのか。小学校時代は、新潟市に生活していたが、当時の小川でのフナ釣り、信濃川での流し釣りなど、私の少年のころの釣り想い出がなつかしく甦ってくるのであるが成長するにつれ海釣りなどへと通うようにもなりました。

依田 章



釣りの妙味というのは、釣りあげた魚を家に持ち帰り、家族とともに夕食のときの酒の肴とするのも楽しいこと。のひとつではあるが、それにもまして楽しいのは、魚との対話の世界であろう。

## 編集後記

本年度最終号の会報124号を「教育会活動の総括」と「実践をふりかえって」のテーマで編集し、お届けすることができました。本年度のまとめを大切に、新たな展望をもって新年度を迎えたいものです。学年末でお忙しいところ、快く原稿をお寄せいただいた先生方にお礼を申し上げます。(望月・土屋)